

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業  
分担研究報告書

アトピー性皮膚炎診療ガイドライン：ブリーチバス療法に関するクリニカルクエスチョンに対する推奨文の作成

研究代表者 下条直樹 千葉大学大学院医学研究院小児病態学 教授  
研究協力者 藤田雄治 千葉大学大学院医学研究院小児病態学 医員

### 研究要旨

本研究の目的は、「アトピー性皮膚炎の治療にブリーチバス療法はすすめられるか」という課題に対して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて、アトピー性皮膚炎に対するブリーチバス療法の効果を検討した研究を検索し、エビデンスレベルの評価と統合で求められたエビデンス総体としてのエビデンスの強さと GRADE システムを参考にして推奨の強さを決定した。

その結果、「ブリーチバス療法は、現時点ではすすめられない(エビデンスレベル B)」と結論した。

#### A. 研究目的

アトピー性皮膚炎患者の病態に黄色ブドウ球菌が関与していると考えられており、治療目的に消毒薬(ポビドンヨード液、次亜塩素酸など)による黄色ブドウ球菌の除菌が試みられてきた。現時点でのアトピー性皮膚炎の治療におけるブリーチバス療法のエビデンスを検討し、推奨度を決定することを目的とした。

#### B. 研究方法

我々は「アトピー性皮膚炎の治療にブリーチバス療法はすすめられるか」という課題に対して、PubMed や医学中央雑誌などのデータベースを用いて臨床研究文献を検索したのち、エビデンスレベルの評価と統合で求められたエビデンス総体としてのエビデンスの強さと推奨の強さを決定した。

#### C. 研究結果

消毒薬として次亜塩素酸は、米国を初めとして海外で古くから使用されており、近年では次

亜塩素酸を溶解した風呂に入浴する、ブリーチバス療法の有用性が報告されてきている。コクランレビューでは、アトピー性皮膚炎の治療として、黄色ブドウ球菌の除菌による治療効果を検討しているが、有意に病勢を改善させたのはブリーチバス療法のみであった。2014年に米国皮膚科学会(American Academy of Dermatology)は、中等症～重症のアトピー性皮膚炎で、感染の関与が考えられる症例に対し、治療選択肢としてブリーチバス療法を推奨すると発表した。一方で、ブリーチバス療法の皮膚バリア機能に対する効果としては、対照と比較し改善効果を認めないとの報告もある。しかし現時点で国内では実際に施行する方法に関する指針はなく、今後の整備が待たれる。

以上の結果から、「アトピー性皮膚炎の治療にブリーチバス療法はすすめられるか」というCQについては、「ブリーチバス療法は、現時点ではすすめられない、エビデンスレベル B」とした。

#### D. 考察

米国皮膚科学会ではブリーチバス療法を治療選択肢として推奨しているが、我が国では実際の施行方法などに関する指針がないのが現状であり、安易な使用はすべきではないと考える。しかし今後我が国でも治療法として検討していくべき課題である。

#### E. 結論

「アトピー性皮膚炎の治療にブリーチバス療法はすすめられるか」というCQについては「エビデンスレベルB」とした。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

<論文発表>

アトピー性皮膚炎の治療におけるブリーチバス療法に関する論文発表はない。

<学会発表>

アトピー性皮膚炎の治療におけるブリーチバス療法に関する学会発表はない。

#### H. 知的財産権の出願・登録状況(予定も含む)

##### 1. 特許取得

なし

##### 2. 実用新案登録

なし

##### 3. その他